

NGOトーク 理事が聞く

北インドで農村民への 地域医療を提供

認定特定非営利活動法人 インド福祉村協会 常務理事 大竹 紘一さん & (特活)名古屋NGOセンター理事 中島 隆宏

北インドで田舎の貧しい人々を対象とした病院を運営したり公衆衛生改善に取り組んでいるインド福祉村協会。アジア保健研修所(AHI)スタッフとしてインドでの地域保健に関する調査・指導の経験もある、中島理事がお話を伺いました。

北インドで 病院を運営

中島 どのような活動をされていますか。

大竹 北インドのクシナガラというところで1998年にアーナンダ病院というカースト外の方を対象にした病院を建て、農村民の地域医療を提供することを目的に運営を支援しています。クシナガラはブッダが亡くなった所として有名です。コメやサトウキビなどが主産業の乾燥した白い粘土質の土壌の貧しい農村です。

中島 インドではいまだにカースト制度が残っていますね。私は主に南インドで活動していました。粘土質なのですがこちらは赤色でしたね(笑)。大竹さんはどのように関わり始めたのですか。

大竹 私は薬剤師として大手製薬会社に勤めていました。1996年に退職後、仕事で付き合いのあった大学の医学部の先生に誘われて、インド福祉村協会

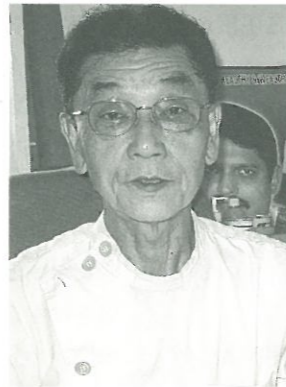
で活動を始めました。クシナガラで土地を確保できましたので、現地で2年間建設のために滞在していました。病院が設立してから最低年2回は現地を訪問しています。

中島 病院を運営するのはご苦労が多いと思います。

大竹 グプタ医師という献身的な医師に支えられています。診察料や薬品代は個人病院の1/3から1/5程度に抑えています。概ね政府系病院と同じ額です。インドでは裕福な階層が個人病院に行くのが一般的です。診察料や薬品代は日本の会員の皆さんなどから寄付金が数百万円あり抑えることができています。ただしインドは年間10%のインフレのため年々厳しくなっています。

政府系病院の医師は、午前中だけ診察して、午後は別の個人病院で稼ぐことが多いのですが、グプタ医師はアーナンダ病院のみです。グプタ先生は地域の人たちから信頼されており、毎日70~100人を診察しており13年間で延べ27万人に上ります。

病院職員はグプタ医師を含めて14名。その



おおたけ こういち
大竹 紘一さん

現地に滞在中は、近隣の村々を訪問して、彼らの健康状態を尋ねて歩き回ります。村の人は親しみをこめて「タケおじさん」と呼んでいます。

うち開院当初からの職員は7名もいます。

地域保健にも 力を入れる

中島 地域保健にも力を入れているそうですね。

大竹 JICAの草の根支援事業により、婦人・妊婦と子どもたちを中心に保健衛生指導を行いました。病院内に専用の教育ホールを新設して、そこで講習会を行いました。啓発用パンフレットやビデオを作成したり、母子健康手帳を作り配布しました。インドの識字率は約60%ですが、女性の識字率は低く50%未満しかありません。そのため母子健康手帳は文字だけでなくイラストを多く入れてわかりやすくしています。

中島 インドの乳幼児死亡率は人口千人あたり66人、妊産婦死亡率は10万人あたり230人です。フィリピンではそれぞれ33人、94人ですから、フィリピンの2倍以上です。貧困も原因のひとつですが、妊婦用の部屋に押し込められて家

族以外は接触しないという現地の差別的な風習にも原因があります。そのため栄養不良や貧血になってしまい、流産することになります。

大竹 この事業の1年目は参加できない婦人や妊婦が多かったのですが、2年目からは夫から外出が許されて出席する方が増えました。来られた方には貧血を無料で検査したりビタミン薬を提供し、婦人や妊婦の生活指導をしています。

中島 女性の地位の低さが原因なのですね。子どもたちへの保健指導はどのようにしていますか。

大竹 小学校を巡回して衛生教育をしています。手洗いとかトイレなど清潔にして、感染予防と衛生指導をしています。

中島 インドの方は直接手で食事をします。手を洗う習慣がないのです、というより手を洗う水がなかったのが現実でした。ところが最近はようやく井戸が普及してきたので、手を頻繁に洗うことができるようになりました。またトイレを作るのも必要ですが、管理をして使い続けることが難しいのです。

大竹 またシラミが多いので、薬を配布したり洗髪の必要性を訴えています。現地の家には床がなく直接土の上で生活しています。寝る時も土の上にゴザを敷くだけです。そのためシラミが湿った地面から髪の毛に移りやすくてとても非衛生で、感染症

や寄生虫も多くあります。せめて土から10cm離して寝るよう呼びかけています。

現地ではマラリアがとても多いのですが、蚊がマラリアの媒体になっているのです。現地では数年前からようやく蚊帳(かや)が広まりましたが、一人用の蚊帳なのでお父さんだけしか使えず、女性や子どもが使うことができません。家族も入れる蚊帳が普及してほしいので、蚊帳がマラリアを予防できることを説明しています。

他にも、爪切りやサンダルの使用も訴えています。

中島 日本と状況がかなり異なっていますね。

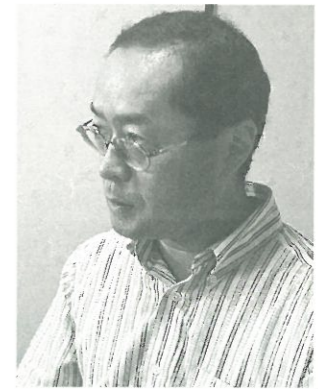
将来は 遠隔治療も

中島 日本からボランティアとして参加される方も多いそうですね。

大竹 若い医師や看護師、また医大生などを受け入れています。1週間滞在する方が多いですが、年単

なかしま たかひろ
中島 隆宏

1988年からAHIに入職。88年から92年まで国内事業、総務担当。93年から2008年まで研修事業を主に担当し、その間、保健、社会開発に関わるアジアのNGOワーカーの育成に取り組む。特に、紛争地域であるフィリピン・ミンダナオのムスリム自治区の保健行政官の研修とフォローアップ事業に10年間従事した経験をもつ。



位で滞在される方もいます。アーナンダ病院ではレントゲン、エコー、血液検査機器程度しかありません。ドクターが問診、聴診、触診などで病気を見つけていくので、日本の検査重点主義との違いに驚かれるようです。「もっと患者さんに触れていこう」という感想をもった方もいます。ここでの経験はきっと日本の医療現場で役立つでしょう。

中島 今後の目標などはありますか。
大竹 今年から遠隔医療の取り組みを始めたところ。血圧を測ったらその日のうちにインドと日本の大学にデータを送っています。今は3,500人分の電子カルテがあります。今年中に体温も記録して、1万人に増やしたいと思っています。

中島 そうやって整理しておく、村全体の健康診断につながりますし、一人ひとりのデータの傾向を見ることで、病気がわかったりするかもしれません。インドや日本の大学の医学部と連携しているのは強みですね。このようにリアルタイムで日本から直接サポートするのはいいアイデアです。他のNGOにも参考になると思います。どうもありがとうございます。

(担当:丹羽)



上:グプタ医師と 下:女性対象の公衆衛生指導

団体概要

認定特定非営利活動法人 インド福祉村協会

〒440-0035
愛知県豊橋市平川南町73(豊橋メイックリニック内)
Tel 0532-66-1010 fax 0532-66-1073
e-mail:info@iwvs.jp http://iwvs.jp



アーナンダ病院